

甘えと被害者意識の再検討

岸本 崇

一、被害者意識と加害者意識

人が他者に攻撃的になるのはどんな時だろうか。

例えばインターネット上において、特定の人物に対して過剰と思われるほどの非難・批判が浴びせかけられる「炎上」事件を目にするのは日常茶飯事である。このとき、攻撃をしている人々は自分自身が「正義」であることを疑わない。なぜならば政治家や有名人が汚職やら不倫やら何らかのスキャンダルを起こした場合や、特定の属性を持つ人々に対して差別的と捉えられうる発言をした場合など、その攻撃の対象にされる者は、いわゆる「社会的な悪」とみなされているからである。

こうした過剰な「正義」を行使することを揶揄する表現として、昨今では「ポリコレ棒で叩く」という言い方がある。「ポリコレ」とは「ポリティカル・コレクトネス（政治的正しさ）」の略語であり、元来は差別的な用語や表現を改めていこうとする活動（例えば「看護婦」を「看護師」と呼ぶなど）を主に意味するものであった。しかし今や「そんな表現をするのは差別的だ、この意見

に反論するならばお前は差別主義者だ」といったように、「ポリコレ」という概念は、自分を弱者の味方の立場に置いて「強者」を叩くための体のいい武器として使われてしまっているのである。

この「ポリコレ棒」という名称は、かつての学生運動において左翼団体が用いた「ゲバ棒」（「ゲバ」は「ゲバルト（Gewalt）＝暴力」の省略）になぞらえてつけられたものである。つまり、こうした現象は、決してインターネット社会になってから現れた新しいものではないのだ。学生運動の頃から、暴力行為を「正しさ」によって免罪し正当化しようとする構造は変わっていないのである。

『甘えの構造』を著した土居健郎は、学生運動の活動家たちについて、彼らが何故大きな影響力を持ちえたのかと問うている。その際に重要となるのが「被害者意識」である。

私が一番関心をもったのは、全共闘の学生たちが加害者

として行動していながら、その行為の被害者たち自身にしばしば加害者意識を呼び醒ます不思議な現象のことであった。私はこの現象を考えているうちに、これは彼らが究極的には被害者の立場に身をおいているからだということに思い至った。【……】被害者意識を持つ人間はただ個人的に被害感を持つばかりでなく、被圧迫民族・困窮者・精神病患者など被害者一般と同一化している。彼らはまさに甘えられないから被害者なのであるが、それでいて被害者としての立場に甘えているといえる。⁽¹⁾

当時の大学側が暴力行為の被害を受けていながら全共闘に対して非難・糾弾を投げかけなかった理由は、罪悪感を抱いていたためであると土居は推測する。全共闘の学生たちは、自分たちがいわゆるブルジョア的生活を送る恵まれた身分であることを自覚し、社会的弱者の存在を見ぬふりをしているという加害者意識に目覚め、その特権を放棄しなければならぬという「自己否定の論理」を掲げていた。このような論理を展開され加害者意識を押しつけられてしまった大学の教官や他の一般学生たちは、容易に全共闘を批判することができなくなる。もしも批判をすれば、現代社会の問題に目を背け、その維持に加担する利己主義者であることになってしまうからである。

土居によれば、この際、活動家たちは「自己否定の論理」を持

ち出すが故に、自身を被害者と同じ立場に置いてしまっている。社会的弱者との連帯を掲げる彼らにとつて、暴力行為は例えば「抵抗権の発動」などと解釈され正当化されてしまうのだ。彼らは特権的身分であるという意味での「加害者意識」を持ちつつも、現に自分たちが暴力をふるっていることについての「加害者意識」は感じなくなってしまうのである。

さて、このように全共闘の学生は自身の加害者性を免罪するという形で「被害者としての立場に甘えている」のであるが、その直前の引用文「彼らはまさに甘えられないから被害者なのである」とはどういうことか。

土居によれば、被害的心理とは、甘えたいにもかかわらず、その甘えを「邪魔される」など、何らかの理由によって甘えられなくなることで意識されるものとされる。土居は左翼活動家たちの甘えについて、フロイトを引き、次のように述べている。「たとえフロイドが神経症の根元をなすと考えたエディプス複合は、見方を変えれば一種の世代間葛藤ということが出来る。この葛藤が発展的に解消されて、幼児が両親と精神的に同一化できた時は、彼らに正常な大人となる道が開かれたことになるが、これは勿論両親および彼らの代表する社会が健全であると仮定した場合のことである⁽²⁾」。土居によれば、現代は、家族関係というミクロにおいても社会現象というマクロにおいても、頼り甘えることのできる父親的権威の失墜した時代である。現代の両親と子ども

関係においては、両者の間に甘え甘やかす「なれ合い」の関係が成立し、フロイトの想定したような世代間葛藤としてのエディプス・コンプレックスを経験することが無くなっている。そしてまた、社会的価値観を代表するとされてきた父親的存在自身が、疎外感に悩み、既存の価値観に対して懐疑的になっている。このような背景のもとで起きた、全共闘に代表される「体制VS反体制」の闘争としての世代間葛藤は、価値観の相違を争点としているのではなかった。「結局新しい世代は、それによって自分たちが生きていくことができる価値観が欲しいのである。そしてそれが古い世代によって提供されていないことに苛立つのである⁽³⁾」(傍点引用者)。こうした「父なき社会」を生きたが故に闘争を行っていた人々を、土居は桃太郎に例える。桃太郎はおじいさんとおばあさんから保護と愛情を受けていても、精神的同一化をすること＝甘えの欲求を満足させることができなかった。故に成人の儀として、ぶつけることのできなかったエネルギーをぶつける鬼征伐を必要とした。『桃太郎』であれば、鬼という敵を倒すことで両親からも社会からも喜ばれ「めでたしめでたし」となるが、現実ではそうはいかない。鬼征伐を行う青年自身が鬼に変わる危険が存する、と土居は言う。

「このような被害者意識は、二重に屈折した甘えの心理を秘めていると見ることができる。というのはもともと被害的心理が先にのべたように甘えの不満に由来していることにかたて加えて、

この場合は、それが意図的に連帯故に選り取られているからである。被害的心理自体は苦痛なものであるが、連帯故に主体的に選り取られた被害者意識は苦痛を感じさせることが少ない。かくしてかかる被害者意識の持主は、サデイスチックな自己満足すら覚えるほどになる」⁽⁴⁾。

冒頭で確認したように、土居の考察した時代状況から五十年を経て、問題の構造は変わっていない。私たちが同一化し甘えることのできるような「自分たちが生きていくことができる価値観」など誰からも提供されえない。そうした満たされない甘えの欲求を抱えた人々は、弱者と「連帯」したつもりになり、不満をぶつけ、自己満足を覚えることで憂さ晴らしをする。

同テーマを扱った別の論文「加害者意識と被害者意識」において土居は、このような在り方に対して「彼ら(引用者注…全共闘)は被害者意識に甘える加害者としてではなく、むしろ加害者意識に悩む、主体的人間として生まれ変わらなければならないのである」⁽⁵⁾と主張している。土居は、彼らが現代社会の被害者であることは認めなければならないと述べつつ、その上で精神病患者を比喻に用いて批判を行っている。精神病患者が病気を患うのは、遺伝や生育環境など様々な影響が原因となっており、患者自身のせいではない。しかし患者が自分の病気について、親のせいや環境のせいにしてはいつまで経っても治ることはなく、自分自身の問題として取り上げる必要があるのだ、と土居は言う。本人

に病気を治そうという気持ちが無ければ、病気は治らないのである。

土居が主張する通り、自身の加害的行為を省みず「被害者」正当」という立場に安住する甘えた態度は改められるべきであると言えよう。だがしかし「加害者意識に悩む」ことが、被害者意識を手放すために本当に必要なことなのであるか。むしろ全共闘の活動家たちが「被害者」の立場に同一化してしまったのが、そもそも自身の「加害者性」を自覚しその解体を試みた結果であったことを思い起こせば、「加害者意識に悩む」という解決の方向性は、加害者と被害者という両方の立場の堂々巡りへと陥りかねないことが分かるだろう。自身の加害者性を批判的に反省しようとする、いつのまにか被害者の立場に身を置いてしまう。被害者意識に居座る態度を克服するためには加害者であることに自覚的にならなければならない。しかし自身の加害者性を批判的に反省しようとする、……。

論文の中で土居自身も認めている通り、「加害者意識に悩む」という態度をとり続けることは難しい。なぜなら「それは加害者意識が必然的に罪悪感を伴い、それが極めて大きな不快と苦痛をもたらすからである」⁽⁶⁾。それでもなお、その不快と苦痛に耐え、罪の意識に悩むという在り方をとるしか道はないのであろうか。当該論文において土居は、被害者意識に逃げ隠れない在り方として宗教的な罪意識に言及して論を締めくくることが、些か唐突で曖昧

な印象は否めない。

この問題の難しさは「加害者」か「被害者」かという二項対立図式に囚われている点にあると筆者は考える。そしてこの構図を乗り越えるための糸口は、「甘え」のなかにすでに存在するのである。

二、甘えのなかに

土居は、加害者意識に悩む必要があるという主張の後に続けて、フロイトが精神病患者に対してエディプス・コンプレックスを自覚させようとした事例を、すなわち被害者意識から加害者意識への転化を試みた事例を紹介している。土居によれば、フロイトがこうした試みを行ったのは、患者を幼児期の性的外傷の「被害者」であると捉えることが治療の上で役に立たなかったためであった。だがフロイトはエディプス・コンプレックスの解釈を重視するあまりに、現実には患者が受けた被害を無視することとなる。こうして土居は次のように述べる。「私は以上、たとい元來被害者であっても、そのことに低迷しないためには自ら加害者として認める必要があることを説こうとして、精神科患者のことに言及し、それについてのフロイトの見解を紹介したのであるが、そうしながらも話は再び一回転して、加害者性に焦点を絞るあまり、根本的な被害の事実を無視することは誤りであるということに帰着

してしまつた。さてもし患者についてこのことが重要であるとすると、現代の悩める青年についてはなお更のことであろう⁵⁾」。被害者意識を持つにいたる何らかの出来事が起こつたことは事実である。現実の被害を全く無視して被害者意識についてのみを責めることは片手落ちになってしまうのだ。

さて、ここで一度視点を変え、「いじめ」の問題から考えを進めていきたい。いじめはまさに「いじめめる側」被害者」と「いじめられる側」被害者」という対立構図を持っている。いじめにおいては、一般的に「いじめめる側」被害者」が悪いとされることが多いだろう。しかし話はそう単純ではない。得てして「いじめられる側」被害者」にも何らかのいじめられる原因があるものである。言い換えよう。「いじめられる側」は単純に「被害者」なのであろうか。

例えば、いじめられやすい人物像として、臆病な性格で常に自分が周囲の人々から嫌われぬ顔色を窺う傾向を持つ人物を思い浮かべてみる。彼は、意図的ではなくとも、周囲の人々を、「危害を加える者」としてみなすことになるだろう。すなわち、このような態度は「潜在的加害者」という性質を相手に押し付けることになる。この構図は、自身を被害者の立場に置くことで加害者性を弾劾していた全共闘の在り方と類似する。あくまで一例ではあるが、こういった事情がある場合を考慮すれば「純粋に一

方的な被害者」が存在するとは言い難い。いじめがあつたという事実を無視することはできなくとも、「いじめられる側」であるからと言って「被害者」の立場に居直るという在り方は許されたい。

しかしながら、もし「いじめられる側」が罪悪感を引き受け「加害者意識に悩む」としても何かの解決になるであろうか。「いじめをした人たちは悪くありません、びくびくしていた僕が悪いのです」などと言つたところで、いじめの状況は何か好転するであろうか。

土居は『いじめと妬み』という対談書において、出版の一年前である一九九四年に中学二年生の大河内清輝君がいじめを苦にして自殺した事件について語っている。清輝君は同級生四人から暴行をうけたり、親の金を盗んで持つてくるよう命じられたりといったいじめを日常的に受け続け、最終的に自宅の裏庭の柿の木で首つり自殺を行つてしまふ。死後に遺書が発見されるまで、親兄弟も学校の先生もいじめに気づくことは無かつた。

土居は、自殺に至るまでいじめが発覚しなかつたのは清輝君本人が隠していたからであり、その理由を、彼がいじめられる側でありながら「罪悪感」を持つていたためであると推測する。「僕からお金をとつていた人たちを責めないでください」「僕が素直に差し出しましたからいけななのです」とかれは遺書に書き残していますが、言い換えれば、「自分が悪いんだ」と彼自身、

本当に思っていたようです。これは、清輝君に共犯者の意識があったことを意味します。被害者ではあるけれども、同時に自分はこの犯罪に参加している、この犯罪を自分は承諾している、という意識です。【……】もし、清輝君に罪悪感がなければ、つまり完全に「単なる被害者」であつたならば、いじめのことを自分の口から言うことができたかもしれません⁽⁸⁾。この対談書の中で清輝君に対して、加害者意識や罪悪感を持つべきだという主張はなされない。故にこそ被害者意識を持ちつつ罪悪感を抱く状態の弊害が明らかになっていると言える。罪悪感を抱くことは、自身の行動の結果を自ら選んだこととして背負い込むことになってしまうのだ。その帰結として、たとえ苦しくても、いじめに抵抗することも助けを求めることも選べない、身動きの取れない状態に陥ってしまったのだ。「抵抗するよりも易しいはずの「助けを求める」ことも、彼はしなかったのです。【……】一つには現代の自立を重んじる教育がもたらす影響が大きいのではないのでしょうか。自立を人間の基本と考えていて、自力で解決できないことを人に頼むわけにはいかない、と、子どもながらに思っていたのかもかもしれません⁽⁹⁾。自立することが尊ばれる現代の状況こそ、土居が『「甘え」の構造』を著し問題提起をするきっかけでもあった。人はけっして一人だけで生きられない。他者を信頼し、甘え頼りにすることができてこそ健全な人間関係も成立するのだ。しかし「自立」や「平等」を重視する近代的思考のなかで

は、「甘え」は依存と同様の否定的なものとして扱われてしまう。土居は、こうした「私が悪いから、こういうことになったんです」と言う清輝君の姿を、敗戦後の日本社会における「模範」として見る。「不当ないじめをしてくる相手とも戦わないという全くの平和主義、それから自分をいじめる相手さえも敵として見ない平等主義、そういう戦後の日本の道徳律を、この少年は見事に守ったとも言えるかも知れません」⁽¹⁰⁾。

平等主義は既に見たように、甘えを成立させていた権威の失墜を招き、父なき社会の成立に貢献した。清輝君の周りには自身をいじめから救ってくれるような安心して甘えることのできる存在がいなかったのである。こうして清輝君は罪悪感によって、だれにも頼れず、頼れる者もおらず、自力でどうにかするしかないという意識に囚われた、甘えることのできない「被害者」となってしまったのである。

次に「いじめめる側＝加害者」の心理に目を移したい。土居は彼らがいじめを行った理由に「妬み」があつたのだろうと推測する。例えば具体的には、お金をせびるといういじめ行為に表れたように、清輝君の家庭がいじめた側の家庭よりも裕福であつたためではないかと土居は考える。

土居によれば、平等主義の時代において、妬みはあつてはならないタブーとして扱われる。そもそも平等が大切だとされるよう

になったのは妬みをなくすためであつたにもかかわらず、表面的にのみ存在しないこととされ、妬みは抑圧されたまま存在し続けることとなつてしまつた。

「妬みは生まれたときから人間に備わつていゝと言つてもいい感情だと思ひますが、育ち方によつて妬みが強く発達する人と、発達しない人がいます。突つ張つて生きる人、世の中の不正が許せない人、「自由と平等」「差別撤廃」を叫ぶ人、これは妬みが強くなりませぬ」(傍点引用者)⁽¹¹⁾。自分たちのことを正義と信じ、「弱者」に同一化し「強者」を攻撃する人々、彼らの心理にあつたのは「妬み」だつたのだ。彼らの振る舞いは、「いじめ」と同じなのである。そうとなれば「いじめの側」はこの現代社会の「被害者」でもある。自身の甘えの欲求を満足させられない不幸な彼らは、幸せに生きていゝように見える人々を妬み、攻撃する。彼らの理屈からすれば妬まれるようなものを持つていゝ「特権階級」は「加害者」であり、正当に攻撃してもいい存在なのだ。整理しよう。妬みの強い人間は、自身を「被害者」の立場に置き、その上で自身を不当な立場に置かせた他者を「加害者」とみなす傾向がある。これはいじめられる者の心理でもあり、いじめられる者の心理でもある。妬みに支配されていゝという点において、いじめられる者といじめられる者は共通していゝ。「被害者」の立場に居直ることは、自身の加害者性から目を逸らすことである。しかし加害者性についての罪悪感を持つことは、自身を甘えること

のできない「被害者」の立場に追いやることにつながる。罪悪感を持つことは「被害者」加害者」の立場から脱け出すことに貢献しない。解消されるべきは「妬み」なのである。

さて土居は、妬みの克服方法について次のように語る。「自分の「妬み」に関して一番大切なのは、「自分は妬んでいゝかもしれない」といゝ自覚を持つことだ。"It's not fair."と言つていゝその不平の裏には、妬みがあるのだといゝことを自覚しなくてはいけぬ。自分も他人も人間である以上妬むものなのだといゝ自覚が必要だと思ひます」⁽¹²⁾。まず必要なのは「妬み」の自覚である。自身の正当性を信じていゝ限り、自分の中の不満と妬みの感情に気づくことはいゝ。

そして注目したいのは次の段階である。ここで土居は「被害者意識」と加害者意識」論文においてのよういゝ罪悪感に悩むべきだといゝ主張はしない。「妬んでいゝけない」とは言わぬのだ。

土居は「自分の感情をもつと大つびらにしてしまふのです」⁽¹³⁾と提案するのである。土居は聖書を引きつゝ、妬みを「エンビイ(envy)」と「ジェラシー(jelousy)」に區別して説明していゝ。エンビイは「あまり表面に出てこなくて、内に秘めていゝ欲望情念」⁽¹⁴⁾とされ、対となるジェラシーは表面に出てくる感情とされる。エンヴィーをジェラシーへと変えること、すなわち自分の妬みの感情を否定したり抑圧したりするのではなく、素直にあら

わにしていくなことが必要なのである。だが勿論、「大つびら」にすると言っても、それは妬みの感情に突き動かされるままになって、不平不満を妬んでいる当の相手にぶつけよという意味ではない。誰かに対して過剰に攻撃的になるのは、むしろ自身が妬んでいることを理解していない者がすることである。誰か一人にでも甘えられること⇨心を打ち明けられることが、妬みを克服する方法なのだ⇨土居は言うのである。

私たちは被害者意識に溺れ誰かに攻撃的になってしまつとき、自分自身の満たされていない気持ちに、気づいていない。無自覚のまま妬みに振り回され、他者を叩くことは控えねばなるまい。だが妬みを抱いてしまうこと自体は悪いことではない。妬みを自力でどうにかしようとして、罪悪感を抱え込もうとする必要はないのだ。自分も相手も信頼し「甘え」られることが、自身を加害者にも被害者にもしない方法なのである。

注

- (1) 土居健郎『「甘え」の構造(増補普及版)』、弘文堂、一九七一年、三七〜三八頁。
- (2) 同書、二三八頁。
- (3) 同書、二五一頁。
- (4) 同書、二六七頁。

- (5) 土居健郎「加害者意識と被害者意識」『「甘え」雑稿』所収、弘文堂、一九七五年、一一六頁。
- (6) 同書、一二〇頁。
- (7) 同書、一九九頁。
- (8) 土居健郎・渡部昇一『いじめと妬み 戦後民主主義の落とし子』、PHP研究所、一九九五年、一六〜一七頁。
- (9) 同書三三頁。
- (10) 同書四〇頁。
- (11) 同書一五〇頁。
- (12) 同書一四九頁。
- (13) 同書一五〇頁。
- (14) 同書二二八頁。

(きしもと・たかし) 筑波大学大学院
人文社会科学研究科